

## メフィストとヨブ

著者	長谷川 茂夫
雑誌名	鹿児島大学文科報告
巻	29
ページ	61-69
発行年	1994
別言語のタイトル	Mephisto und Hiob
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/16448">http://hdl.handle.net/10232/16448</a>

# メフィストとヨブ

長谷川 茂 夫

『ファウスト』第二部・第五幕でファウストは、メフィストとの契約の際に決めた約束の言葉を発して、ついに息絶える。賭けに勝利したと信じるメフィストは、我が物であるファウストの魂を捕まえようと、肉体からの離脱の瞬間を待ち受けるが、突然現れた天使達によって魂を横取りされるばかりではなく、彼らの投じた薔薇が燃える炎に文字通り身も心も焦がされて肌には醜い火傷を負い、まるでそれがヨブのようだと言う。

「これはしたり——まるでヨブじゃないか。出もの腫れ物  
体じゅうところ嫌わず、自分でもぞっとする。

それでも同時に勝ち誇りもする、自分自身を見極めていけば、  
自分自身と自分の出自を信頼していれば。」<sup>1)</sup>

何げなく読めば、ヨブの名は、単に腫れ物の代名詞たる哀極まる存在として、メフィストの自己憐憫を飾り立てるためだけに使われているように見える。しかし、実際にそうであろうか。そのような比喩として使われるには、ヨブの名前は、詩人ゲーテにとっても、作品『ファウスト』にとっても、重すぎるのである。

『聖書』全般に通じていると自負していたゲーテにとっても、「ヨブ記」は、特別な書であったと思われる節がある。例えば、F.v. ミュラーは、ゲーテが「ヨブ記」について述べた次の言葉を報告している。

「これは難しい本だ。これについての意見が一致をみることは決してないだろう。これがモーゼ以前のものだとする人達も幾人かいる。これについて私自身の考えはあるが、それをひとに押し付けるつもりはない。」<sup>2)</sup>

また、エッカーマンがゲーテの息子アウグストとともにイタリアへと旅立つに際して、ゲーテは、「視よ彼わが前を過ぎたまふ然るに我これを見ず彼すゝみゆき賜ふ然るに我之を暁(さとら)ず」という「ヨブ記」からの引用<sup>3)</sup>を書き贈り<sup>4)</sup>、同じ語句を自分の『形態学』の標語にも採用しているのである<sup>5)</sup>。

そして別けても重要なことは、『ファウスト』という作品全体の世界を予め規定する働きをもつ「天上の序曲」の構成が「ヨブ記」からの借用であるという夙に知られた事実である。

「それゆえ、私の『ファウスト』の発端が、「ヨブ記」のものと幾分似ている

としても、それはまた完全に正しいことであるし、私はそれによって称賛されはしても、非難されるいわれはない。」<sup>6)</sup>

神と悪魔が一人の人間をめぐる賭けをするという、「ヨブ記」と『ファウスト』に共通する構成の一方の当事者であるメフィストがこの場でヨブの名前を口にするには、「天上の序曲」を想起させ、さらにそこでは隠されていた問題性を明るみに出すよう働くのである。トゥルンツは、「出来事は再び、天上の序曲が設定した枠組の中に帰着している」<sup>7)</sup>と述べ、ここ「埋葬」の場と「天上の序曲」の関連を指摘している数少ない論者の一人であるが、「ヨブ記」との関連にまでは触れていない。

構成が内容の一部であるならば、それによって「ヨブ記」の問題性は自ずから『ファウスト』の問題性と何らかの拘わりを持つ筈であるが、両者の関係は、それほど簡単なものではない。単純なアナロジーから言えば、当然神と悪魔の賭けの対象であるファウストがヨブに対比されなければならない。しかし、ここでのメフィストは、自分がヨブと同じ立場に立たされたと主張しているのである。その意味するところを理解するためには、しばらく目を「ヨブ記」そのものの考察へと転じる必要がある。

「ヨブ記」を一言でいえば、何ら罰を受けるべき罪を持たぬ者が苦難を被る物語である。ヨブは神自らが認める程の義人であったが、神は悪魔の申し出を受け入れて、彼に苦難を送らせる。その具体的な内容の要約を矢内原忠雄から引用しよう。

- 「1. 全財産を急に失ってしまったこと。
2. 子供を全部、しかもにわかにならぬこと。
3. 健康を失い、人の忌み嫌う病気にとりつかれ、肉体の激痛に襲われて、不眠と恐怖の夜がつづいたこと。
4. 社会的地位を失い、通りがかりの童子にまで軽蔑されたこと。
5. 住居を失い、村外れの塵捨場に坐り、犬が来てその手足の膿をなめたこと。
6. 妻が無理解であって、「神を詛ひて死ぬるにしかず、」と言ったこと。
7. 見舞に来た友人だちも無理解であって、彼を慰めることが出来ず、かえって彼の心を傷つけたこと。
8. 何よりも、彼を打ち給う神の御心がわからなかったこと。」<sup>8)</sup>

矢内原の言う友人達の無理解とは、彼らが「神は義人に祝福として人生の幸福を与へ、悪人に刑罰として苦難と災禍を与え給ふ」という「公式的・機械的な応報観」<sup>9)</sup>に則り、ヨブが災禍を被ったのは彼に咎があるに違いないとしたことである。人間は誰しも罪人であるという一般論をここで持ち出すことも誤り

である。ヨブが神も認めた義人であるということが、第一の前提になっているからである。ヨブは、自らの正しさを確信している。

「視よ我すでに吾事を言並べたり必ず義しとせられんと自ら知る」<sup>10)</sup>

彼はこの事を証明してくれる者を求めるが、その対象はやはり神しかない。自分に対して不正義をなした相手を正義の判定者とするという矛盾を犯さざるを得ないのである。結局、ヨブと友人達の激しい論争の後に神は嵐の中から語りかけ、世界の創造者としての自らの偉大さを示してヨブを圧倒する。しかし、「意外なことには、ヨブがあれほど苦しんで友人たちと論争した苦難の意義と神の審判の問題について、エホバの御言は一言も触れるところがなかったのである。」<sup>11)</sup>

試練に耐えたヨブが以前にも増した祝福を授けられ繁栄の内に長寿を全うすることで「ヨブ記」は終わる。しかし現世的な応報を述べたこの結末が単に物語の体裁を整えるための蛇足のようにみえることは否めない。それは、キルケゴールの言葉を借りれば「いわば、神と人間とのあいだの大事件、サタンが神とヨブとの間に悪を据えたところから起こり、そして全体が試練であったということで終わるあの雄大な恐るべき訴訟において、人間の側に立ってなされた内容豊かな抗議」<sup>12)</sup>に対する本質的な回答になっていないからである。現実の世界に於いて悪人が繁栄し、罪がないと思えるような人々が過大な災禍を被る事例は歴史に満ち溢れている。

そして、現実には最もありふれており、しかも取り返しのつかない災疫である死が、ヨブに対して振るうことを悪魔に許された災いから除外されていたという問題がある。ヨブ自身は苦難のうちで死を求めたが、それは与えられなかった。しかしここで、死が上述の現世的な報酬を用意するために排除されていると考えるならば、それは誤りであろう。この物語に限定すると、死は却って問題性を回避し、安らかな来世という、現実的応報の変形に逃げ込む道を開くだけだからである。「ヨブ記」はあくまでも、現実の生のなかでの神の摂理の完全性を問う書なのであり、そして、それに対する論理的な回答は明確な言葉にされないまま終わっているのである。

ある意味で人間精神の一つの代表となり、ファウストという人物像とも優に比肩出来るヨブの高貴な名を、ゲーテは皮膚病患者の代表としてだけ用いているのであろうか。確かにメフィストの口調には嘲笑の気味が感じられる。しかし、それは悪魔が人間の真摯な活動に対して恒常的に取っている態度であり、メフィストがいつもファウストに接している基本姿勢と同じなのである。そして既に述べたように、メフィストは自分をヨブに引きつけてものを言っている。冒頭の引用部分は無論メフィスト自身に関しての陳述であるが、そのうちヨブ

に関しても当てはまると解釈できるのは、最初の2行だけではない。ヨブが己の正しさを確信し神に対して果敢に論争を挑んだ姿は、「自分自身を見極めていれば、同時に勝ち誇りもする」という形容から外れず、また「自分の出自」とは、ヨブが当然抱いていただろう神の選民たるイスラエルの民族意識を意味しているようにもとれるのである。矢内原は「ヨブ記が神の選民たるイスラエル民族の民族的苦難の問題を個人の苦難の形で表現しようとしたもの」<sup>13)</sup>という学説のあることを紹介している。さらにファウストの「不死なる部分」を天使たちに横取りされたあとの、「さて誰に向かって俺は訴えかければいいんだ／俺が手に入れた権利を誰が取り戻してくれるんだ」<sup>14)</sup>というメフィストの嘆きは、ヨブを念頭に浮かべればはっきりした意味を持つ。メフィストは自分がヨブと同じ意味での不正を被っていると意識しているのである。いずれの場合も訴えかける相手は、まさに不正を行ったその当事者でしかありえない。ヨブの場合は神エホバであり、メフィストの場合は「主」である。そして、上述したようにヨブにはそれが出来たのだが、メフィストにはその道が閉ざされている。ゲートは、「主」をここに登場させてメフィストに語りかけるようにはしなかった。その理由は後で明らかになるだろう。

メフィストの抗議を不当とし、腫れ物を悪に対する懲らしめと解釈してはならない。メフィストには何の落ち度もない。彼は「主」との約束を忠実に守り、ファウストとの契約を違えてもいない。「血で書かれた証文」<sup>15)</sup>によっても、ファウストの魂は正当に彼の所有に帰すべきである。そして何よりも、「天上の序曲」に於ける規定によって、メフィストの悪としての存在と活動は、「主」の世界構造の内に組み入れられ、場と意義を与えられているのである。

「人間の活動はじつにだらけやすいものだ。

すぐに際限もなく休みたがる。

だから私は人間に仲間をつけてやって、

それが誘ったり唆したり、悪魔として働くようにする。」<sup>16)</sup>

それなりに自己の存在意義を全うしているメフィストからファウストの魂を不当に奪おうとする天使たちは、メフィストに言わせれば「あいつらだって悪魔なんだ。ただ猫をかぶっているだけ」<sup>17)</sup>なのである。それゆえ天使たちの影響から立ち直ったときメフィストが、「高貴な悪魔の部分は救われた」<sup>18)</sup>という表現を用い、後にファウストに対し天使たちによって用いられる「精神世界の高貴な一員が悪から救われた」<sup>19)</sup>というものと同じ言い方で自画自讃しても当然である。ヨブという人物の光の下に「埋葬」の場を見直してみると、そこでのメフィストは、倒錯的な情欲に目が眩んだ間抜けな悪魔という印象を振り払い、一種の真摯さを獲得している。しかもそれによって全体のイローニッシュでフ

モリスティッシュな滑稽劇の調子は崩されることなく、「この大層真面目な冗談」<sup>20)</sup>の最終幕に相応しい深みが備わってくるのである。

メフィストとヨブのどちらも、神（「主」とエホバ）から認められた特性ゆえに苦難を被るという不条理において本質を同じくしている。そして、この不条理性は反射・屈折してファウストの昇天が必然的に備えている不条理性を照らし出すのである。民衆本やクリストファー・マーローなどの先例が採用したファウストの地獄墮ちという結末とは異なり、ゲーテは彼が昇天しなければならないと考えた。いつゲーテがファウストの昇天を決めたかの創作上の時期を無視して純粹に筋の展開だけからいえば、既に「天上の序曲」の段階でそれは決定されている。「主」が、次のように断定しているからである。

「善良な人間は、その暗い衝動のうちにあっても  
正しい道をきつと心にとめている」<sup>21)</sup>

「天上の序曲」は、作品全体の発端形式のみならず、終局をも「ヨブ記」を通じてモチーフ的に規定しているのである。ファウストは、決して彼が最後の事業とした干拓という「善行」の報酬を受けるのではない。彼は、悪魔と結託して行った殺人、姦淫、詐欺、黒魔術などの数え切れない悪の行為にも拘わらず昇天しなければならない。素朴な因果応報思想を超越してこの奇跡を成し遂げるための典拠として「ヨブ記」に於ける神の絶対的な超越性が求められているのである。神が「完全者（まったきもの）と悪人（あしきもの）とを等しく滅ぼしたまふ」<sup>22)</sup>ように、神は、いかなる悪の行為者をも救済することが出来る。天使たちに示された条件は、ただそれが「常に努め励む者」<sup>23)</sup>というだけで、行為の善悪は全く問われていない。そして、この不条理性の解消は、「ヨブ記」で言葉には示されなかったのと丁度同じように、『ファウスト』の場合に於いても、次の神秘主義的な「山狭」の場の「言葉に表せない(unbeschreiblich)」<sup>24)</sup>領域に委ねられている。

そして、このファウストの昇天は、決して天国での安らぎなどを意味しない。それは、「運命が私たちを一般的な非存在へと還元したように見える場合にも、なお存在し続けるという希望」<sup>25)</sup>なのであり、決して終焉ではなく、現実の生の活動を継続できる、より高い生への移行なのである。

このようにしてファウストの救済は、「主」とメフィストとの賭けを超越した更に高い次元においてなされている。それゆえ「主」がメフィストの前に現れて弁明することはあり得ない。そして「主」をゲーテの神と同一視してもならない。それは「天上の序曲」の筆法からしても明らかである。

この序曲はあくまでも寓意的に鑑賞されなければならない。三人の天使達のせりふにつられて、これが宇宙の壮麗さと神の偉大さを如実に表現し尽くすも

のと思われることは、ゲーテの意図に反するだろう。当然のことながら、天使達の伝える情景が本来の規模のまま観客の眼前に繰り広げられるべくもない。ここでは、誰も神とその創造の業を把握しきれないことを、天使達とともに心の中で実感し、同意すればよいのである。視覚的にはむしろこの場面は、ゲーテが子供の頃に見たような人形芝居の枠に入れて演じられるべきものかもしれない。それは、「天上の序曲」の成立年代と作品内部に於ける位置との両方によって裏付けられる。まずこの序曲が書かれたと推定されている1797年から1806年頃は、ゲーテがすでに、第一部のシュトゥルム・ウント・ドゥランクの激情に刻印された作風を捨て、より観照的、寓意的な筆法の第二部に既に着手していた時期であり、従ってこの序曲は、内容的にむしろ第二部の圏内に属するものと考えられるからである。次に、作品を鑑賞する読者・観客の心中には、この序曲の直前に置かれた「舞台での序曲」の余韻が残っていると想定しても自然であろう。それはつまり、ここで呼びだされる太陽や星や天上は、「ドイツの舞台上の上での」<sup>26)</sup>と「座長」が言うような意味合いでの宇宙なのであって、現実——天上を現実と呼ぶことが許されるならばだが——を代用する模写としてではなく、あくまでも作り物や書き割りであることを意識して見るよう観客に要求されている、ということなのである。また、ともすれば空虚な壮大さの中へと拡散し麻痺するやもしれぬ観客の感受性を、堅実な制限の内に止めようとする基本姿勢は、メフィストの性格の卑俗性によって明確化されている。彼は、「御大層な言葉は使えません」<sup>27)</sup>と断言し、また、天使達が神の業を讃えた「開闢の日のように」<sup>28)</sup>という言い回しをそのまま人間に関してパロディー化し、矮小化している<sup>29)</sup>。そしてここに登場する「主」自身も、このような前提を踏まえたかぎりでの顕現と見做さなければならない。「主」は、ゲーテの神と同等ではなく、この場面の為だけに形象化された存在なのであり、「笑う習慣はおやめになっていなければの話ですがね」<sup>30)</sup>と、メフィストに皮肉られもする対象なのである。「主」は、神の超越性を脱ぎ捨て、極めて「人間的」<sup>31)</sup>に振る舞っている。

このような性格を持つ「天上の序曲」で提示された「悪の存在理由」もまた、絶対的なものではない。人類全体への刺激という立場と、悪の犠牲となる個人としての立場の乖離と相反は常に存在する。そしてこの二つの立場は、どちらも共に正しい。なぜならば、個人的経験の世界とその感覚的眞実は生の根源をなすが、人間はそれだけでは満足するものではない。そして悟性による世界解釈を必要とするが、それだけに固着すれば生との親密な連携を失って精神的に枯渇するのである。『ファウスト』が哲学の垂流に陥らず、眞正な文学であり続けている訳は、この矛盾を正しい形で含んだままにしているところにある。そ

の一例が、「暗鬱な日・野原 (Trüber Tag・Feld)」の場である。

そこでは、グレートヒェンの絶望的な状況を冷笑し、「あの娘が初めてという訳じゃありませんよ」<sup>32)</sup>と言うメフィストをファウストは激しくなじる。

「犬め！汚らわしい化け物め！——(中略)——初めてではない、だと！ひどい！ひどすぎる！人間の心で分かるものか。この惨めなどん底に沈んだいきものがひとりだけじゃないなどと。総てを許すという永遠の存在の目の前で、あの最初の犠牲がのたうちまわる苦しみを受けたことも、ほかの人間全部の罪をあがなうのに足りなかったというのか。おれには、この女たったひとりが苦しんでいるというだけではわたしが千切れそうだ。それをお前は何千人の運命も平気でせせら笑っているんだな。」<sup>33)</sup>

ゲーテは『初稿ファウスト』に手を加えて第一部を完成させるにあたり、散文中で書かれた悲劇的な場面を韻文に書き改めたが<sup>34)</sup>、この場面は散文のままに留めた。その直接的人間感情の真实性を保持したかったのであろう。

また、ここで言われている「あがない」の根底にある「原罪」の考えも、「悪の存在」に対する可能的な説明のひとつなのである。ゲーテ個人に即して言えば、神の摂理によって統一された世界の完全性そのものに対する疑いは、既に幼い頃リスボンの大地震で罪のない人々が多数犠牲となったという報道に接したときから、心の内に芽生えていた。晩年に書かれた『詩と真実』でゲーテはその時のことを、上に引用した「完全者と悪人とを等しく滅ぼしたまふ」という「ヨブ記」の記述を連想させる言い方で報告している。

「天と地の創造者であり保持者である神が、——(中略)——正しい者を正しくない者とともに等しい滅びの犠牲となした」<sup>35)</sup>

少年ゲーテがこの疑念の解答を捜し求めたことは疑いない。「ヨブ記」は必ずやその手掛かりとなったであろうし、また同じ『詩と真実』で紹介され、本人が新プラトン主義やヘルメス文書や神秘主義やカバラの影響を受けたと認めている独自の世界創造観も解答のひとつであろう。そこでは、プラトンのデミウルゴスに相当する不完全な世界創造者としてのルシファーが挙げられている。

「さてそこで総ての災いは、もし我々がそう呼ぶことを許されるならば、ルシファーの一面的な傾向からのみ生じた」<sup>36)</sup>

それゆえ、『ファウスト』で提示された「人間への刺激」という見解は、ゲーテ個人の思想の中でも、幾つかある理論の一つにすぎない。「主」が神の限定された反映であるように、この説明も『ファウスト』という作品のなかでの限定的な妥当性を認められるべきなのである。

理論が成り立ちさえすればそれで全てが終結するわけではない。神の絶対的な正しさと人間の苦悩との間隙が埋まることはないだろう。そして『ファウス



ト』では、悪魔もまた「人間的に」苦しむのである。

### 註

- 1) Z. 11809ff.
- 2) Den 26. Januar 1825. Goethes Gespräche. Artemis Verlag, Zürich und Stuttgart 1971. S. 749.
- 3) 「ヨブ記」第9章第11行.
- 4) Den 21. April 1830. Eckermann: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens.
- 5) Weimarer Ausgabe, III. Abteilung, Bd. 6.
- 6) Eckermann. Den 18. Januar 1825.
- 7) Hamburger Ausgabe, (以下 HA と略す) Bd. 3, S. 623.
- 8) 矢内原忠雄『聖書講義Ⅷ ヨブ記 約百記略註 ヨブ記研究 ヨブ記講義』岩波書店 1978. 331～332頁.
- 9) 矢内原, 前掲書312頁.
- 10) 「ヨブ記」第13章第11行.
- 11) 矢内原, 前掲書322頁.
- 12) キルケゴール『反復』榊田啓三郎訳, 岩波文庫 青六三五 — 一. 164頁.
- 13) 矢内原, 前掲書310頁.
- 14) Z. 11832f.
- 15) Z. 11613.
- 16) Z. 340ff.
- 17) Z. 11696.
- 18) Z. 11813.
- 19) Z. 11934.
- 20) Brief an W. v. Humboldt vom 17. März 1832.
- 21) Z. 328f.
- 22) 「ヨブ記」第9章第22行.
- 23) Z. 11936.
- 24) Z. 12108.
- 25) HA, Bd. 12, S. 224.
- 26) Z. 231.
- 27) Z. 275.
- 28) Z. 250.
- 29) Z. 282.
- 30) Z. 278.

- 31) Z. 353.
- 32) HA, Bd. 3, S. 137.
- 33) HA, Bd. 3, S. 137f. (中略) は筆者による。
- 34) Breif an Schiller vom 5. Mai 1798.
- 35) HA, Bd. 9, S. 30f. (中略) は筆者による。
- 36) HA, Bd. 9, S. 351f.